

『伊勢物語』 版本にみる挿絵



図 10 嵯峨本『伊勢物語』  
(国立国会図書館蔵) 慶長 13 年 (1608) 刊



図 11 『新板伊勢物語頭書抄絵入読曲』  
(東京都立中央図書館蔵) 延宝 7 年 (1679) 刊



図 12 『改正伊勢物語』  
(東京都立中央図書館蔵) 延享 4 年 (1747) 刊



図 13 『伊勢物語読曲』  
(東京大学総合図書館蔵) 宝暦 12 年 (1762) 刊

(平成 25 年 6 月 21 日受付)

(平成 26 年 1 月 14 日採録)

小袖雛形本にみる「かきつばた」模様



図1 『御ひなかつた』



図2 『御ひなかつた』



図3 『御ひなかつた』



図4 『諸国御ひなかつた』



図5 『源氏ひなかつた』



図6 『友禅ひながた』



図7 『花鳥雛形』



図8 『新板花陽ひなかつた綱目』



図9 『正徳雛形』

表6 『伊勢物語』 版本の「東下り」描写

刊行年		書名	挿絵モチーフ	画工	備考
慶長 13	1608	伊勢物語 (国立国会図書館蔵)	板橋 (5)・水沢・かきつばた・幔幕 雲取り・主人公・従者2・食事風景		嵯峨本
寛文 2	1662	新板絵入伊勢物語 (国文学研究資料館蔵)	「みかわの国八はし」の標示 嵯峨本の挿絵を継承		
寛文 9	1669	新板伊勢物語多入 (鉄心斎文庫蔵)	「みかわの国八はし」の標示 嵯峨本の伝統的な構図 二段組・右本文左上段挿絵 下段挿絵は「宇津の山」		
延宝 7	1679	新板伊勢物語頭書抄絵入読 曲 (東京都立中央図書館蔵)	二段組・十二丁左下挿絵 板橋 (7)・水沢・かきつばた 幔幕・松・築山 立ち姿でかきつばたを眺める構図	菱川師宣	
元禄 10	1697	伊勢物語大成 (筑波大学附属図書館蔵)	二段組 (菱川師宣挿絵襲用) 板橋 (8)・水沢・かきつばた・幔幕松・築山・ からころもの折句		
宝永 5	1708	新板絵入七宝伊勢物語大全 (東京都立中央図書館蔵)	二段組・上段礼法掲載の女訓書 九丁左下段挿絵「八はし図」(伊勢物語大成の挿 絵を襲用) 板橋 (8)・水沢・かきつばた・幔幕・ 築山		
享保 6	1721	花玉伊勢物語 (東京都立中央図書館蔵)	二段組・上段は説明「大和物語抜書」 下段挿絵・十六丁左に「八はし図」板橋 (5)・草木・ 一人の従者は座り、もう一人と主人公は立ち姿 の構図		
享保 14	1729	絵入伊勢物語 (東京大学総合図書館蔵)	九丁見開き左挿絵 右は芥川を描く「なりひら もやう」の標示 板橋 (8)・水沢・かきつばた (人物とかきつば たをクローズアップ)	近藤清春	
延享 4	1747	改正伊勢物語 (東京都立中央図書館蔵)	七丁に挿絵 板橋 (4)・水沢・かきつばた・松 (人 物を大きく描く)	西川祐信	
宝暦 12	1762	伊勢物語読曲 (東京大学総合図書館蔵)	上巻十丁に挿絵 橋 (1)・かきつばた・松 (か らころもの折句)	月岡丹下	

表5 「かきつばた」模様のモチーフ（年代別集計）

年代	雛形数	杜若・八橋	杜若・八橋・水	杜若・水	杜若（雲取）	八橋	バリエーション
寛文	2	3	1		1		
延宝	1	1					
天和 貞享	6	4	1	1 観世水	3 水沢	1	
元禄	11	6	1	3 流水川 流水・扇	2	1 舟・波 松・桜	3 *杜若・干網 *杜若・稲妻 *風吹かきつばた
宝永	4	2		1	1 雲取		2 *杜若・石かけ *丹前紋
正徳	5	2	1	4 雲取	3		1 *帆にかきつばた
享保	9			3 雲取 観世水	5 雲取	1 水鳥	3 *杜若・おもだか *杜若・藤・波 *伊達紋（杜若・香図）
元文	5	3		2	1		2 *四季かきつばた *扇かきつばた
寛保	1			1	1		
延享	5			1	2		3 *四季かきつばた *花菱かきつばた *杜若に鷺
寛延	1			2 観世水			
宝暦	7	1		4 杜若・水 辺 杜若・水 松・瓢箪・ 吹出	2		6 *桐にかきつばた *河水に杜若 *浪水に杜若 *やり水に杜若 *干網に杜若 *琴水に杜若
明和	4	1（扇）	1	1	1		1 *杜若に立葎
安永	3			1 鮎川に杜 若			3 ①燕子花・筆・筆入硯 ②替りハッ橋ニ花燕 ③かきつばたに蓬
天明	1				1		
	65	23	5	24	23	3	24

表4 小袖雛形本にみる「かきつばた」模様のモチーフ

杜若・八橋	23	八橋	3	
杜若・八橋・水	5	八橋		
杜若・水	24	八橋（文字）・舟・波・松・桜		
		八橋・水鳥		
杜若・水	3	バリエーション	22	
杜若・観世水				
杜若・流水				
杜若・流水・桧扇		かきつばた・干網	2	花菱かきつばた
杜若・川		かきつばた・稲妻		かきつばたに鷺
杜若・水・雲取		風吹かきつばた		桐にかきつばた
杜若・水辺		かきつばた・石かけ	2	河水にかきつばた
杜若・流水・吹出・松・瓢箪		帆にかきつばた		浪水にかきつばた
杜若・鮎川		丹前紋		やり水にかきつばた
		かきつばた・おもだか		琴水にかきつばた
杜若	23	かきつばた・香囀（伊達紋）	替り八ッ橋二花燕	
		かきつばた・藤・波	かきつばたに立葎	
杜若	2	四季かきつばた	燕子花・筆・筆入れ・硯	
杜若・沢（文字）		扇かきつばた	かきつばたに蓬	
杜若・雲取				

表3 制作年代別の雛形本にみる謡曲模様の推移

年号	雛形本数	謡曲模様／雛形図 平均値
寛文年間 (1661 ~ 1673)	2	9.5
延宝年間 (1673 ~ 1681)	2	9.5
天和年間 (1681 ~ 1684)	4	6.5
貞享年間 (1684 ~ 1688)	8	5.1
元禄年間 (1688 ~ 1704)	16	10.6
宝永年間 (1704 ~ 1711)	5	1.8
正徳年間 (1711 ~ 1716)	7	4.9
享保年間 (1716 ~ 1736)	17	3.7
元文年間 (1736 ~ 1741)	9	2.7
寛保年間 (1741 ~ 1744)	2	2.9
延享年間 (1744 ~ 1748)	6	3.2
寛延年間 (1748 ~ 1751)	2	3.8
宝暦年間 (1751 ~ 1764)	12	3.8
明和年間 (1764 ~ 1772)	4	4.6
安永年間 (1772 ~ 1781)	4	8.3
天明年間 (1781 ~ 1789)	3	3.5
寛政年間 (1789 ~ 1801)	2	7.6

表2 謡曲意匠のモチーフと典拠 (続)

謡曲意匠	数	意匠のモチーフ	典拠
大会	1	流水・花	『十訓抄』第1
皇帝	1	網・松・舟・波	『古今和歌集』巻4・184
盛久	1	檜扇・笹	『平家物語』長門本 巻20
東北	1	梅・笹・柴垣	『和漢朗詠集』納涼
忠度	1	枝垂れ桜・舟・波	『平家物語』巻7・巻9「忠度最期」
蟻通	1	椿・竹垣	『貫之集』『俊秘抄』
女郎花	1	松・網籠・波・鶏頭の花	『古今和歌集』仮名序
放下僧	1	牛車・竹雀・柳・薄・礪白	『古今和歌集』巻4・169 巻13・625
安宅	1	網・松・竹垣	『義経記』巻7
善知鳥	1	網干・波・蘆	「うとう」伝説
賀茂	1	藤・源氏車・波・河骨	『賀茂神社縁起』
張良	1	蛇・橋・劍・巻物・冠・唐団扇・波・沓	『史記』
龍虎	1	龍・虎	『古今和歌集』巻13・625
謡尽	4	鼓・笛・鈴・面箱・扇 中啓烏帽子・羽団扇・松	
その他	6	能道具1 能作り物1 能面尽1 狂言尽(揃)2 壬生狂言1	

表2 謡曲意匠のモチーフと典拠(続)

謡曲意匠	数	意匠のモチーフ	典拠
橋 弁 慶	2	橋・太刀・長刀 鉞 松・波・扇・兜	『義経記』巻3
舟 弁 慶	1	舟・波・蘆	『吾妻鏡』『義経記』巻4「義経都落ちの事」 『源平盛衰記』46
蝉 丸	2	御所車の輪・草花・葛屋 琵琶・藁	『古今和歌集』巻3 『和漢朗詠集』 『平家物語』巻10「海道下」
猩 々	2	菊・扇・盃・柄杓	『万葉集』『和漢朗詠集』(花付落花)
西 行 桜	1	桜	『和漢朗詠集』『山家集』
雲 林 院	1	桜・竹垣	『伊勢物語』4段 『和漢朗詠集』
田 村	1	松・枝垂れ桜・桜・弓矢	『清水寺縁起』
小 督	1	琴・琴柱	『平家物語』巻6「小督」
那須の与一	1	扇・弓矢・波	『平家物語』巻11
草紙洗小町	1	草紙・小町の文字	『古今和歌集』仮名序 『和漢朗詠集』
海士(人)	1	立浪	『日本書紀』『大織冠物語』
咸 陽 宮	1	扇・宮・月・魚	『平家物語』巻5「咸陽宮の事」
熊 野	1	桜・柳・幔幕	『古今和歌集』巻1・31 『平家物語』巻10「海道下」
卷 絹	1	反物	『万葉集』巻2・141 『沙石集』
頼 政	1	欄干・柳・将棋の駒	『平家物語』巻4「宮の御最期」 「橋合戦」
遊 行 柳	1	柳・川	『新古今和歌集』巻3・262
羅 生 門	1	兜・太刀・飾馬・札	『平家物語』剣の巻
自然居士	1	柳・舟・川	『和漢朗詠集』立春
右 近	1	竹垣・牡丹	『万葉集』巻1・20 『伊勢物語』99段 『和漢朗詠集』
天 鼓	1	蔓花	『和漢朗詠集』納涼 『法華経』化城喻品 『唐華嚴経』
藤 戸	1	桜・波・縄	『平家物語』巻10「藤戸」
鶺 羽	1	桜・草	殺生禁断の説話
呉 服	1	反物	『日本書紀』応神紀 雄略紀
当 麻	1	波・網干・花	『古今和歌集』巻1・29 『古今著聞集』
三 井 寺	1	松・竹・桜	『古今和歌集』巻1・31
二 人 静	1	桜・網	『和漢朗詠集』春夜
撰 待	1	滝・紅葉	『義経記』巻8 『平家物語』巻11
小袖曾我	1	竹垣・笹	『曾我物語』巻7
檜 垣	1	紅葉・菊	『後撰和歌集』『大和物語』
清 経	1	桔梗・秋草	『平家物語』巻8「宇佐行幸付緒環」 「太宰府落」 『源平盛衰記』
是 界	1	桜・若松	『是害坊絵詞』
班 女	1	椿・柴垣・桐	漢詩 『怨歌行』
小 塩	1	波・網	『伊勢物語』76段



表2 謡曲意匠のモチーフと典拠

謡曲意匠	数	意匠のモチーフ	典拠
杜若(八橋)	102	杜若・橋・川・沢	『伊勢物語』9段『古今和歌集』410
菊慈童	96	菊・水・波	『太平記』巻13「龍馬進奏の事」
竹生島	37	兔・波	『竹生島縁起』
石橋	23	唐獅子・牡丹・橋・二枚の扇	『十訓抄』寂昭入唐
木賊	22	木賊・兔・月・鎌	『夫木和歌抄』源仲正
鼓の瀧	18	鼓の皮・瀧・浪・藻塩草 紅葉	『拾遺和歌集』
井筒	17	井戸・薄・波・紅葉	『伊勢物語』17段・23段・24段
龍田	16	龍田川・紅葉	龍田明神(神楽)『古今和歌集』 『壬二集』『神皇正統記』巻1
芭蕉	13	芭蕉・雪	『和漢朗詠集』春夜
松風	11	松・汐くみ・桜・網干・波	『万葉集』『和漢朗詠集』『源氏物語』
三輪	10	杉・苧環	『古事記』三輪明神『俊頼口伝集上』 『江談抄』第1
桜川	8	桜・川	『和漢朗詠集』春興
砧	6	卷絹・砧槌	『漢書』『蒙求』『和漢朗詠集』 『白氏文集』
高砂	6	松・箒・波・網干	『古今和歌集』「序聞書」
難波	6	松・梅・椿・掛物・水仙・波	『古今和歌集』仮名序『古事記』下巻
夕顔	6	源氏車・夕顔	『源氏物語』「夕顔」
羽衣	5	羽衣・松・岩・花 編笠・扇・冠・羽衣・鉞	『丹後風土記』逸文 羽衣伝説 『万葉集』
三番叟	4	翁面・若松・太鼓・鼓・笛 烏帽子(剣先)・中啓・鈴・扇 打杖・面箱・稲扇・冠・団扇	祝典曲『翁』での狂言 五穀豊穡を寿ぐ
富士太鼓	4	太鼓・藤	『後撰和歌集』『新古今和歌集』
定家蔓	4	紅葉・色紙・短冊・岩石・蔓	『謡曲拾葉抄』「雑文集」の伝説
初雪	3	雪・草花	
紅葉狩	3	紅葉・幔幕	『古今和歌集』『新古今和歌集』
鉢木	3	鉢木・盆栽・鎌・巻紙 編笠・竿・布袋	『太平記』巻35『和漢朗詠集』(立春)
松虫	3	薄	『古今和歌集』仮名序『和漢朗詠集』
鞍馬天狗	3	天狗の面・鼓・太鼓・巻物 太刀・扇・烏帽子・花 羽団扇・杉	『万葉集』『和漢朗詠集』(花付落花) 『義経記』巻1「牛若鞍馬入りの事 しやうもん坊の事 牛若貴船詣の事」
野宮	2	鳥居・柴垣・花・雲・蕨	『源氏物語』「賢木」
老松	2	松葉	『源平盛衰記』巻32「北野天神飛梅津」
箆	2	染絹・梅・竹	『平家物語』長門本巻9『源平盛衰記』
玉葛	2	桜・網・松葉・紅葉	『古今和歌集』巻4・184『源氏物語』
鶴	2	車・菊・蛇・弓矢・動物・雲	『平家物語』巻4「鶴」
舟橋	2	舟・薄	『万葉集』巻14
翁	2	翁面・烏帽子	

表 1 小袖雛形本にみられる謡曲意匠 (続)

雛形名	雛形 総数	出版年	謡曲意匠
雛形井出の水	98	1748 延享 5 年	菊慈童・杜若・松風・石橋・狂言尽
雛形兎桜	120	1749 寛延 2 年	鼓の瀧・竹生島・石橋
当世模様雛形千代の春	96	1750 寛延 3 年	杜若・富士太鼓・松風・菊慈童
雛形花橘	60	宝暦初年頃	三番叟・鉢木・木賊
雛形伊勢の海	100	1752 宝暦 2 年	龍田・杜若
雛形菊の下水	93	1753 宝暦 3 年	三番叟・菊慈童
当世模様雛形千歳草	91	1754 宝暦 4 年	石橋・鼓の瀧・菊慈童
当世模様雛形母子草	80	1754 宝暦 4 年	桜川・菊慈童・木賊・松風
当流模様雛形滝の流	96	1755 宝暦 5 年	石橋・竹生島・能面尽
雛形都の園	66	1756 宝暦 6 年	杜若・木賊・龍田
雛形袖の山	98	1757 宝暦 7 年	菊慈童・鼓の滝・竹生島・杜若
雛形接穂桜	97	1758 宝暦 8 年	三番叟・竹生島・橋弁慶・龍田・菊慈童 杜若
雛形東の錦	100	1758 宝暦 8 年	竹生島・石橋・菊慈童・杜若
雛形都の富士	102	1760 宝暦 10 年	竹生島・杜若・木賊・菊慈童
当世模様雛形木の葉硯	34	1763 宝暦 13 年	杜若
雛形吉野山	95	1765 明和 2 年	龍田・杜若
雛形春日山	94	1768 明和 5 年	杜若・木賊・遊行柳・菊慈童・狸々
新板榎模様吾妻雛形	95	1769 明和 6 年	木賊・羽衣・杜若
新雛形京小袖	95	1770 明和 7 年	羅生門・三番叟・竹生島・鞍馬天狗 菊慈童・杜若・龍田
新雛形若みどり	32	1773 安永 2 年	石橋・菊慈童・羽衣・杜若
当流雛形筆津花	36	1778 安永 7 年	木賊・竹生島・石橋・菊慈童・杜若
雛形紋羽二重	116	1778 安永 7 年	石橋・菊慈童
新雛形曙桜	90	1781 安永 10 年	箆・鉢木・羽衣・桜川・謡尽・夕顔 杜若・壬生狂言
彩色雛形九重にしき	50	1784 天明 4 年	木賊
当世都雛形	95	1785 天明 5 年	石橋・芭蕉・木賊・高砂・杜若
染模様極彩色新雛形千代の袖	30	1786 天明 6 年	菊慈童
手鑑模様節用	小袖 15	1789 寛政元年	謡・能道具
新雛形千歳袖	92	1800 寛政 12 年	砧・高砂
	9265		

表1 小袖雛形本にみられる謡曲意匠 (続)

雛形名	雛形 総数	出版年	謡曲意匠
正徳雛形	92	1713 正徳3年	井筒・杜若・鼓の瀧・難波・鞍馬天狗 舟橋
雛形祇園林	144	1714 正徳4年	難波・石橋・鼓の瀧・三輪・羽衣・杜若 菊慈童・井筒・鞍馬天狗
当世四季ひいな形	100	1715 正徳5年	杜若・鼓の瀧・龍田・竹生島・菊慈童 芭蕉
当風美女雛形	120	1715 正徳5年	鼓の瀧・三輪・龍田・竹生島・巻絹 松虫
墨絵ひなかつた都商人	106	1715 正徳5年	井筒・木賊
珍色雛形都風俗	94	1716 正徳6年	杜若・菊慈童・竹生島・井筒・石橋
雛形西川夕紅葉	96	1718 享保3年	竹生島・三輪・杜若・芭蕉
西川ひな形	83	1718 享保3年	杜若・桜川・夕顔・菊慈童・砧
今様染分四季雛形	112	1718 享保3年	竹生島・老松
雛形菊の井	122	1719 享保4年	放下僧・杜若・竹生島・菊慈童
雛形菊の笛	50	1720 享保5年	石橋・舟弁慶・竹生島
雛形八重桜	102	1720 享保5年	石橋・菊慈童
雛形浜荻	60	1720 享保5年	菊慈童・杜若
絵本雛形不断桜	60	1720 享保5年	杜若・菊慈童・石橋
当流模様雛形鶴の声	113	1724 享保9年	鼓の瀧・菊慈童・竹生島・翁・砧・高砂 井筒
雛形糸薄	100	1727 享保12年	菊慈童・竹生島
当流模様雛形天橋立	114	1727 享保12年	三輪・石橋・竹生島・杜若・翁・張良 菊慈童
光林雛形わかみとり	110	1727 享保12年	巻絹
加賀友禅雛形	30	1727 享保12年	松風
御伽ひな形	30	1728 享保13年	鼓の瀧・杜若
雛形宿の梅	112	1730 享保15年	猩々・羅生門
ひいなかつた三光鳥	121	1732 享保17年	杜若
雛形染色の山	112	1732 享保17年	三輪・鉢木・杜若
雛形音羽の滝	109	1737 元文2年	定家葛・謡尽
雛形水の色	114	1738 元文3年	杜若・木賊・菊慈童
雛形紅葉の錦	95	1738 元文3年	菊慈童・桜川
光林すかつた雛形鶴の友	93	1739 元文4年	杜若・竹生島・桜川
雛形富士の根	100	1739 元文4年	桜川・木賊・杜若・能造物
当世光林雛形軒の玉水	112	1739 元文4年	杜若・木賊・定家蔓・竹生島
雛形絹笠山	101	1739 元文4年	菊慈童・謡尽
当世新板雛形紅葉の山	72	1740 元文5年	菊慈童・杜若
雛形萩の野	104	1741 元文6年	龍田・松風・竹生島・能道具
雛形竜田川	106	1742 寛保2年	杜若・井筒・菊慈童
雛形龍の清水	105	1742 寛保2年	鼓の瀧・菊慈童・石橋
雛形鸚鵡石	100	1745 延享2年	菊慈童・杜若・木賊・謡尽
当世模様雛形龍の糸	92	1745 延享2年	石橋・杜若・菊慈童
雛形三千風	100	1745 延享2年	菊慈童・杜若
当流模様ひいなかつた都の春	104	1747 延享4年	杜若・菊慈童・狂言揃
雛形愛染川	104	1747 延享4年	自然居士・定家蔓・菊慈童・龍田

表1 小袖雛形本にみられる謡曲意匠

雛形名	雛形 総数	出版年	謡曲意匠
御ひいなかた	200	1666 寛文6年	木賊・井筒・西行桜・竹生島・老松・小督・鼓の瀧・富士太鼓・
御ひいなかた	200	1667 寛文7年	那須与一・杜若芭蕉・草紙洗小町・初雪・龍田・菊慈童
御所雛形	28	1674 延宝2年	杜若・菊慈童・龍田
新板小袖御ひなかた	85	1677 延宝5年	海士・龍田・桜川・松虫・芭蕉・野宮 菊慈童
四季模様諸礼絵鑑	43	天和頃	龍田・初雪
御雛形万女集	32	天和頃	石橋・箆・鼓の瀧
新板当風御ひいなかた	54	1684 天和4年	杜若・龍田・菊慈童
徒然拾遺雛形	48	天和・貞享頃	杜若・鼓の瀧
風流絵本御ひいなかた	21	貞享頃	石橋
小袖もやう鑑	59	貞享頃	菊慈童・芭蕉・松風
模様伊勢土産	40	貞享頃	咸陽宮・竹生島・鼓の瀧
今様御ひいなかた	98	1685 貞享2年	杜若・高砂・菊慈童
諸国御ひいなかた	190	1686 貞享3年	難波・菊慈童・松風・鼓の瀧・龍田・砧紅葉狩・杜若・松 虫・富士太鼓
源氏ひなかた	140	1687 貞享4年	熊野・石橋・杜若(八橋)・井筒・木賊紅葉狩
女用訓蒙図彙	56	1687 貞享4年	杜若・菊慈童・三輪・井筒
友禅ひいながた	121	1688 貞享5年	井筒・杜若
当世染ひな形	50	元禄初年頃	石橋
高砂雛形	46	1690 元禄3年頃	高砂・菊慈童・玉葛・雲林院・田村・難波・右近・杜若・天鼓・ 八橋・藤戸・鶴羽・呉服・当麻・舟橋・三輪・東方朔 三井寺・弁慶・羽衣・鶴・二人静・撰待 小袖曾我・檜垣・清経・是界・班女・融井筒・小塩・大会・ 皇帝・盛久・定家 東北・松風・忠度・蟻通・女郎花・安宅善知鳥・加茂
元禄三年雛形	46	1690 元禄3年頃	鶴・野宮・蟬丸・頼政・玉葛・夕顔
新ひなかた	50	1690 元禄3年	高砂・杜若・難波
都ひいなかた	138	1691 元禄4年	菊慈童・難波・龍田・松風・杜若
としの花	32	1691 元禄4年	芭蕉
万宝御雛形	40	1692 元禄5年	菊慈童・杜若
余情ひなかた	40	1692 元禄5年	松風・砧
袖ひいなかた	50	1692 元禄5年	石橋・杜若・井筒・菊慈童
当世染様千代のひいなかた	103	1694 元禄7年	菊慈童・杜若
下模様御ひいなかた	46	1696 元禄9年	杜若・富士太鼓
太平雛形	103	1696 元禄9年	芭蕉・桜川・杜若
当流模様雛形松の月	80	1697 元禄10年	鼓の瀧・杜若・井筒・菊慈童・芭蕉
新板和国ひいなかた大全	116	1698 元禄11年	芭蕉
当流七宝常磐ひいなかた	124	1700 元禄13年	竹生島・菊慈童・杜若
花鳥雛形	114	1703 元禄16年	菊慈童・杜若
丹前ひいなかた	114	1704 宝永1年	砧・杜若・菊慈童
当世模様委細ひいなかた	100	1705 宝永2年	高砂・三輪・杜若
新板花陽ひいなかた綱目	110	1708 宝永5年	菊慈童・杜若
諸色雛形花見車	74	宝永頃	菊慈童・竹生島
女中談合ひいなかた	98	宝永頃	三輪・芭蕉・杜若
新板風流雛形大成	116	1712 正徳2年	石橋・三輪・井筒・杜若・夕顔

- 15 版本集成』竹林舎、二〇一一年、二九五頁。
- 16 本稿で掲載した挿絵は嵯峨本を除き、画工が明記された版本を採用した。寛文二年版は、明治まで刷り続けられた『伊勢物語』のベストセラーである。
- 17 「頭書」は匡郭の中を上下二段に区切り上の段に注を施したもので、一種の注釈書である。元禄以降、女訓物や和歌、物語、さらに百科便覧的内容を合刻した『伊勢物語』が流行した。
- 18 元禄十年（二六九七）刊『伊勢物語大成』の巻頭には、「新版伊勢物語よみくせ并二百人一首絵抄／三十六人哥仙」と第一行に記したよみくせ一丁があり、その最後には「古今和歌集序」として同かな序の抜粋六行がある。二丁以降は、上段が百人一首絵抄と三十六歌仙の絵抄、下段が伊勢物語本文と挿絵になっている。
- 19 本文版式は二階本で上段は、「常にまきま<sup>マキ</sup>え知るべき条々」等女訓を記し、下段は伊勢物語本文と二十八場面二十三図の挿絵がある。一丁の「正月のてい」に始まり、「三月三日ものせつく」「五月五日あやめのせつく」「七月七日七夕といふ」「九月九日菊のせつく」を記載。女訓書である。
- 20 この挿絵は、版本の挿絵以前に宝暦三年（一七五三）刊『絵本龍田山』の構成において描かれたとある。
- 21 藤島綾「国文学研究資料館蔵『伊勢物語』絵入板本和古書マイクロフィルム解題（一）慶長〜貞享 二〇〇八年。解題（二）元禄〜正徳 二〇〇九年」によれば、慶長から正徳年間には二二九の『伊勢物語』板本が刊行されているとの報告がある。
- 22 片桐洋一『伊勢物語の研究』「研究編」「資料編」明治書院、一九六八・九年。
- 23 伊藤正義『謡曲集上』「解題」新潮日本古典集成、新潮社、一九八八年。
- 24 伊藤正義「謡曲「杜若」考―その主題を通して見た中世の伊勢物語享受と業平像について―」『文林』二〇号、一九六七年。
- 25 大津有一『伊勢物語古注釈の研究』石川国文学会、一九五四年。
- 26 山本登朗氏は江戸時代を通して庶民に読まれた伊勢物語版本は、旧注の理解であったと述べている。山本登朗「絵で見る『伊勢物語』―近世絵入り版本の世界―」『日本文学と美術』、和泉書院、二〇〇一年、一六四・一六六頁。
- 27 片桐洋一「伊勢物語肖聞抄 文明九年本・宗長注書入」『伊勢物語古注釈大成』第三卷、笠間書院、二〇〇八年、九九頁。
- 28 片桐洋一『伊勢物語』「研究編」第八編「伊勢物語の享受と研究 第六章 鎌倉時代勢語注釈書の影響」明治書院、一九六八・九年。十八世紀から十九世紀の初頭に成立した『謡曲拾葉抄』〔犬井貞恕（一六二〇―一七〇二）著、空華庵忍鑑（一六七〇―一七五二）補〕巻八にも、「冷泉流伊物注云八橋とは八人をいづれも捨ず思ひ渡す心也八人といふは三条町有常娘定文妹伊勢小町當純妹染殿内侍初草女也云々」とあり、古注を引用している。
- 29 「杜若」観世流小謡集、檜書店。
- 30 今西祐一郎校注『通俗伊勢物語』平凡社、東洋文庫五三五、一九九一年。
- 31 本文は『萬葉集』（新日本古典文学大系 岩波書店、二〇〇〇年、二〇〇二年）による。
- 32 河上繁樹「小袖を飾った源氏物語―江戸時代における源氏模様の変容―」『世界の中の『源氏物語』』、臨川書店、二〇一〇年。
- 33 『伊勢物語』本文から最も離れた伊勢物語絵に「燕子花図屏風」（尾形光琳筆、紙本金地著色、六曲一双、根津美術館蔵）がある。金地に群生する燕子花だけを描いている。
- 34 八橋を意匠化した作品に桃山時代の摺箔裂がある。東京国立博物館蔵『紅白段草花短冊八橋模様摺箔』は、毛利家伝来の小袖で紅白の段替りに模様は、刺繍と摺箔であらわされており、紅地部分の刺繍の一部に三つの板橋とかきつばたが描かれている。山内麻衣子氏は、「桃山時代の小袖模様における文芸性について」のなかで、シカゴ美術館所蔵『片身替四季草花模様摺箔』の「杜若」意匠は、連歌や謡曲、幸若舞と絡みながら表現されていると指摘している。
- 35 西野春雄校注『謡曲百番』新日本古典文学大系五七、岩波書店、一九九八年、七六一頁。
- 【附記】 本稿をなすにあたり、貴重な資料の閲覧・調査させていただきました天理大学附属天理図書館に厚く御礼申し上げます。

『能之図式』などの能楽関連書が続々と刊行されている(注35)。謡曲の短い一節を集めた小謡本は、寺子屋の教材となり庶民教育の一翼を担っていた。『伊勢物語』を主題とした謡曲には、「杜若」「井筒」「雲林院」「小塩」「右近」「隅田川」がある。いずれも小袖意匠に描かれている。小袖のかきつばた模様は、伊勢物語の享受と深く関わりながら、多彩な出版文化の中で生成され展開したと考えることができる。

## 注

- 1 切畑健「近世染織における『文芸意匠』」京都国立博物館編『工芸にみる古典文学意匠』紫紅社、一九八〇年。小袖文様の寓意については、小寺氏の研究がある。小寺三枝「小袖文様の発想法―寓意性について」『お茶水女子大 学人文科学紀要』通号十七号。
- 2 河上繁樹「小袖雛形本にみる源氏模様の展開」「人文論究」五九(一)、二〇〇九年、「小袖にみられる『伊勢物語』の模様について」『伊勢物語享受の展開』竹林舎、二〇一〇年。
- 3 山内麻衣子「桃山時代の小袖模様における文芸性について―練緯地肩身替四季草花文様縫箔(シカゴ美術館蔵)から―」『美術史』一五八、美術史學會、二〇〇八年。
- 4 佐々木佳美「江戸時代の町人女性の小袖に見られる「文芸意匠」―小袖模様雛形本の分析を通して―」服飾文化学会『服飾文化学会誌』(二〇一〇)、二〇〇九年。
- 5 本文は『伊勢物語』(新日本古典文学大系、岩波書店、一九九七年)による。
- 6 寛文六年(一六六六)刊の『御ひいなかた』には、『伊勢物語』がテーマの人物像を描いた四図が収載されている。この人物像は、再版された寛文七年刊『御ひいなかた』には削られているが、「八はしのもよう」は延宝七年(一六七九)刊菱川師宣画『新板伊勢物語頭書抄絵入読曲』に描かれる挿絵に近い。『伊勢物語』版本の影響と考えられる。
- 7 本稿では一冊の雛形本に複数のかきつばた模様が描かれている場合、雛形本の最初の頁に掲載された雛形図の模様を一例として提示している。
- 8 書名は柱刻「たかさこ」による。この雛形本の謡曲模様については、稿をあらためて論じたい。『高砂雛形』には謡曲「杜若」以外にも『伊勢物語』を主題とする謡曲「井筒」「右近」「雲林院」「小塩」が描かれている。模様は巻一に御所風・お屋敷風、巻二に町風・傾城風、巻三に遊女風・風呂屋風、巻四に若衆風・野郎風と四部構成で表わされている。
- 9 『雛形西川夕紅葉』(享保三年(一七一八))には、かきつばた模様が二図掲載されている。一八九番には「もん処かうの図(づ)」にかきつばた」とあり、小袖の伊達紋に、「香の図・かきつばた」が描かれており、源氏物語・伊勢物語を伊達紋として表現している。また正徳四年(一七一四)刊『雛形祇園林』にも『伊勢物語』をテーマとする「おひのもよう」がある。
- 10 かきつばたを「燕子花」と表記する雛形図の初出は、宝暦七年(一七五七)刊『雛形袖の山』である。模様題に「燕子花」とあり、かきつばたと水流を描いている。安永十年(一七八一)刊『新雛形曙桜』の八十七番の模様図には、「替り八ッ橋二花燕」「地ひわちゃ白上友禅いり」とあり、変形の八橋にかきつばたを燕のように描いている。松坂屋所蔵『流水杜若に燕模様振袖』は、現存する江戸時代後期の振袖である。白地に色挿しと型鹿の子、色糸と金糸の刺繍で水辺に咲く杜若を描き、飛燕のモチーフを添えている。
- 11 表1からもわかるように、元文二年(一七三七)刊『雛形音羽の滝』に「謡曲意匠」を複数集めた謡尺模様が登場して以来、一七八〇年代まで謡尺模様が流行することによると考えられる。現存する「謡曲尺模様小袖」(国立歴史民俗博物館蔵)には、「簾」「嵐山」「紅葉狩」「鞍馬天狗」「邯鄲」「竹生島」「木賊」「鉢木」「羽衣」「鶴飼」「杜若」「松風」「安宅」「狸々」の十四の謡曲モチーフが描かれている。
- 12 千野香織『日本の美術六 三〇一号 絵巻伊勢物語絵』至文堂、一九九一年。千野香織氏は、「八橋」のモチーフの変化について次のように述べている。「十三世紀の写本では、蜘蛛手の水流と短い木の橋、小さなかきつばたであり、室町時代後半の写本には、水面に八つの短い橋がジグザグに継がれて描かれている。以後、木の短い橋がジグザグに継がれていればそれは八橋を表わすものとされ、同時に、かきつばたの花が大きく華やかに描かれるようになった。「くもで」は完全に忘れ去られ、視覚的に魅力に満ちたかきつばたの花と継ぎ橋がこの段の主役となったのである。嵯峨本の図様はこうした変化の後に完成したものであった」四〇〜四四頁。
- 13 関口一美氏の『伊勢物語』版本の分類を採用させて戴いたが、雛形本の発行年に合わせて一部省略している。関口一美『伊勢物語の整版本』『伊勢物語

八橋の、蜘蛛手に思はるる。今とても旅人に、昔を語る今日の暮、やがて馴れぬる心かな、やがて馴ぬる心かな

八橋は謡曲の詞章に詠まれ、人びとに謡われることによって、業平と契った八人の女性の比喩であると理解され、享受されていたと考えられる。

つまり、「東下り」には八橋は欠かせないモチーフであり、謡曲「杜若」での八橋とは八人の女性として理解されていること。さらに謡曲の流行した時期には雛形本に八橋の模様が多く描かれていることから、『伊勢物語』の理解は雛形本の模様に影響を与えているということがわかる。この一例を見ることにより、江戸の人々の『伊勢物語』の読みと理解は、その時代の雛形本の模様にも影響を与えていると考えることができる。

謡曲の詞章は版本にも掲載されており、延宝六年（一六七八）刊『伊勢物語ひら言葉』（外題『伊勢物語平詞』、内題『業平昔物語』）は、菱川師宣の名を記す絵入り版本であるが、その冒頭部分には謡曲「杜若」の詞章がみえる（注30）。

では杜若はどのような植物として受け止められてきたのだろうか。かきつばたは、水湿地に自生するあやめ科の多年生草木。『和名類聚抄』に、

蘇敬曰、劇草、一名馬蘭加岐豆波太

とある。『万葉集』（注31）に「かきつばた」を詠んだ歌を拾ってみると、

墨吉之 浅沢小野之 垣津幡 衣尔摺著 将レ衣日不レ知毛 卷七

（一一三六）

吾耳哉 如是恋為良武 垣津旗 丹頬合妹者 如何将レ有 卷十（一九八六）  
垣幡 丹頬経君叫 率尔 思出乍 嘆鶴鴨 卷十一（二五二二）

とあって、いずれも恋しい人との物理的、心理的な隔たりを詠っている。かきつばたの万葉仮名は「垣津幡」「垣津旗」「垣幡」であり、いずれも「垣の布」の意味をもつ。垣は隔てであり、「隔てられた布のような花」という意味合いである。『天木和歌抄』にも、

杜若咲きてや花のへだつらんとだえがくるるなこのつきはし

とあり、「杜若」を「隔ての花」として詠んでいる。また「東下り」をふまえた定家の歌には、

せき地こえみやこ、ひしきやつはしにいと、へたつるかきつはた哉

とある。関所を越え、遙かな都が偲ばれる八橋。その橋のたもとに垣をなして咲くかきつばたの花は、ますます都を隔てて恋しさを募らせる。杜若は都とわが身を隔てる花として意識されていたことがわかる。河上繁樹氏は宇治橋のイメージから寛文年間の小袖に多く描かれた「橋」は「恋のシンボル」であると述べている（注32）。八橋もそのひとつであろう。前掲『俳諧類船集』の「八橋」の付合には「から衣、杜若、恋」とある。

## おわりに

本稿では小袖雛形本の「かきつばた」模様の展開を『伊勢物語』版本の挿絵と謡曲「杜若」の詞章から検討した。その結果、十七世紀後半の雛形本に描かれたモチーフは、「かきつばた・八橋・水」であったが、十八世紀にはかきつばたの花が「東下り」の象徴として描かれることが明らかになった。この表現の変化には、浮世師が手がけた『伊勢物語』版本の挿絵の影響が考えられる。十八世紀の版本の挿絵は、『伊勢物語』本文から次第に離れ、かきつばたの花が大きく描かれるようになったからである。（注33）。

また集計データから小袖雛形本に八橋が多く描かれる時期は、謡曲が最も流行した時期であることがわかった（注34）。謡曲「杜若」は、『伊勢物語』を典拠としながらも中世古注にみられる一般的な理解にもとづいていることはすでに述べたとおりである。花の精という幻想的な女体のシテが、昔男業平の華麗な恋の数々を題材に歌い舞う作品であり、八橋のモチーフは、業平と契った八人の女性の比喩として理解され、享受されていた可能性はきわめて高い。小袖雛形本の「かきつばた」のモチーフは、まさに当時の人々が読みとった『伊勢物語』の姿を描きだしているといえる。

謡曲を広めたのは謡本の普及である。謡本の出版は、貞享・元禄時代に頂点を迎え、この時代には読み物としての絵入り『狂言記』や『舞楽大全』『能之訓蒙図彙』

#### 四 八橋とは何か

絵入りの版本『伊勢物語』が庶民に普及するのは、慶長元和頃からである(注21)。江戸時代には『伊勢物語』はどのように読まれていたのか。

『邦訳日葡辞書』の「イセモノガタリ」という見出し語には、「歌の或る書物」と記述されており、歌学のために読まれていたことを記すのみである。しかしその一方で平安時代以来、「在五が物語」(『源氏物語』総角巻)、「在五中将の日記」(『狭衣物語』)などの呼称から、『伊勢物語』は、虚構の物語を越えた在原業平の事績を伝える物語として読まれていたことがわかる。鎌倉時代に入りこの業平の面影を求める『伊勢物語』の読み方は、簡潔な記述の背後に人物や場所の固有名詞を探る『和歌知頭集』という古注を生み、『冷泉家流伊勢物語抄』となって『伊勢物語』享受のありかたに影響を及ぼすことになった(注22)。

能「杜若」に『伊勢物語』古注の影響を指摘したのは伊藤正義氏である。伊藤氏は、『伊勢物語』と『伊勢物語』古注と能「杜若」の関係を次のように述べている。

「杜若」は『伊勢物語』七・八・九段の、いわゆる東下りの段をふまえ、とりわけ第九段の三河の国八橋の杜若の精を主人公にして、業平の往事を回想し、草木成仏する形で構成されている。しかも杜若の精とは、単なる植物の精ではなく、二条の後の形見(象徴)であることが構想上の根本となっている。そのような考え方は、実は中世における『伊勢物語』の享受のあり方を反映したものである。『伊勢物語』とは、業平の行状を仮構の形で示したもので、その物語の真実―いつ、誰の、どんな事件を物語化したのか―を読み解くのが中世の享受の方法であった。(略)たとえば、業平の東下り(『伊勢物語』九段)とは実は二条の後の密事が頭われて東山へ蟄居させられたことの譬喩の物語だとする。『冷泉家流伊勢物語抄』によれば、(略)物語のすべてがものの譬えだとする立場から、同書はまた、

かきつばたといふは、人の形見にいふ物なり。されば二条の後の御事を御方見といはんために、かきつばたと云ふなり。

とあり、

「杜若」のみならず、「三河」を「三人を恋ひ奉る事也。…二条后…染殿后…四条后等也」とし、「八橋」を「八人をいづれも捨てがたくて思ひわびたる心也。八人とは、三条町・有常娘(一説、染殿内侍)・伊勢・小町・定文娘(一説、妹)・初草女・当純娘・齋宮・此八人也」などと解釈し、享受されてきたのである。(注23)

氏は、能「杜若」を『伊勢物語』の古注を拠り所とした「中世の業平像の劇化」としながら、近世初期にはこのような解釈が成立していたと述べている(注24)。鎌倉時代に成立した『冷泉家流伊勢物語抄』をはじめ古注の特徴は、登場人物のすべてに実在人物の名を具体的にあてることにある。この荒唐無稽さを批判したのは、室町時代の一条兼良『伊勢物語愚見抄』や宗祇の『伊勢物語肖聞抄』であり、古来、多くの注釈が行われてきた。大津有一氏の『伊勢物語古注釈の研究』以来、室町時代の注やその流れを汲む人々の注を「旧注」、契沖に始まる近世国語学者の注釈を「新注」と呼んで区別している(注25)。江戸時代には契沖が『伊勢物語臆断』を執筆し、国学者の荷田春満の『伊勢物語童子問』や賀茂真淵の『伊勢物語古意』によって旧注説がきびしく否定され、『伊勢物語』は、在原業平とは無関係な虚構の作品であるということが強く主張されている。しかし、前掲『新板絵入七宝伊勢物語大全』(宝永五年(一七〇八)刊)には、初段頭注の冒頭に「むかしと八肖聞抄に云…」とあり、旧注『伊勢物語肖聞抄』を踏まえていることは明らかである(注26)。

『伊勢物語肖聞抄』(注27)の「八橋」の注釈をみると、

水行川のくもて 水縦横に行所なるへし。

橋をは(八)わたせる 橋をは(八)わたすにあらず。くもてのあまたあるなるへし。

とあり、古注にみられた解釈はない。しかしながら、古注を否定する一条兼良の『愚見抄』を始め『肖聞抄』ですら、古注の影響から脱し切れていないことを片桐洋一氏は指摘している(注28)。江戸時代を通して広く普及した小謡の「杜若」では、次の詞章部分が語われている(注29)。

在原の、跡な隔てそ杜若、跡な隔てそ杜若、沢辺の水の浅からず、契し人も



嵯峨本から約五十年後、寛文二年（一六六二）に刊行された『新版絵入伊勢物語』（国文学研究資料館蔵）（注16）の挿絵は、嵯峨本の構図を継承しているが、「みかわの国八はし」と標示があり、挿絵だけで一丁にせず、本文字面と表裏の一丁になっている。さらに寛文九年（一六六九）刊『新版伊勢物語入』（鉄心斎文庫蔵）は、二十八場面の嵯峨本系の挿絵を二場面ずつ上下に組み合わせ、雲や霞などで区切って十四図としている。挿絵場面は、嵯峨本の伝統的な構図を襲用しており、下段には宇津の山の挿絵を掲載している。

## （二）江戸中期の師宣系版本の挿絵

江戸中期には頭書本、教養書などさまざまな形の『伊勢物語』版本が刊行されている（注17）。延宝七年（一六七九）刊『新版伊勢物語頭書抄絵入読曲』（東京都立中央図書館蔵）は、頭書本で刊記に「菱川吉兵衛」とあり、挿絵は浮世絵師菱川師宣とみられる。二段組の十二丁左下にある挿絵には、嵯峨本以来描かれていた食事風景はなく、画面下に築山に松・幔幕、右側に七つの板橋とかきつばたを描き、主人公と従者一人は、立ち姿でかきつばたを眺めるように描かれている（図11）。師宣の描く挿絵は、嵯峨本の構図を使いながらも、人物描写を変え、嵯峨本には描かれていない築山と松が加えられている。この描写は師宣が加えた「変化」のひとつである。

元禄以降の『伊勢物語』版本の中には『伊勢物語』の上蘭に文学作品や実用的教訓書を配しているものがある。元禄十年（二六九七）刊『伊勢物語大成』（筑波大学附属図書館蔵）は、『伊勢物語』と『百人一首』の両方を網羅した女訓書である（注18）。挿絵は師宣の挿絵を襲用しているが、かきつばたの花は大きく描かれ、画面に主人公の詠む歌が書かれている。宝永五年（一七〇八）刊『新版絵入七宝伊勢物語大全』（東京都立中央図書館蔵）（注19）はのちに『万葉伊勢物語大全』と書名を変え、正徳三年（一七一三）、享保七年（一七二二）と三度にわたって刊行された版本で、『女重宝記』を上蘭に絵入りで配置している。九丁左下段の挿絵は、前掲『伊勢物語大成』の図を襲用したものである。

享保六年（一七二一）刊『花玉伊勢物語』（東京都立中央図書館蔵）の挿絵は、刊記によれば大和絵師長谷川光信だが、「大和物語抜書」とあり、十六丁左に「八はし図」がある。挿絵には一人の従者は座り、もうひとりの従者と主人公は立ち姿で描かれており、人物もかきつばたも大きく描かれている。

## （三）江戸後期の浮世絵師による版本の挿絵

ここでは近藤清春、西川祐信、月岡丹下による版本の挿絵を検討する。

享保十四年（一七二九）刊『絵入伊勢物語』（東京大学総合図書館蔵）は、「浄瑠璃の六段を模した本」といわれ、本文はわずか十九丁半に詰め込み、挿絵は本文から離れて異なる章段の絵を一図にまとめている。見開き八面を挿絵にあてており、最初の見開き図左上に「画工近藤清春筆」と絵師名を表示している。九丁見開き右は「芥川」を描き、左に「なりひらもやう」とある。その挿絵の構図は主人公と従者が八橋とかきつばたを眺めるものであるが、人物の頭部が大きく稚児風に描かれている。

延享四年（一七四七）刊『改正伊勢物語』（東京都立中央図書館蔵）は、京都の浮世絵師西川祐信の挿絵による版本である。挿絵は浮世絵風で十一図あり、そのうち三図は見開きになっている。構図は見開き二面を大きく使い「富士の山」の絵を描き、その右隅に「八橋」の場面を入れている。挿絵には四つの板橋、主人公が従者と沢辺のかきつばたを眺める姿で描かれているが、人物はクローズアップされている（図12）。挿絵の箇所は本文の内容と一致していない。

宝暦十二年（一七六二）刊『伊勢物語読曲』（東京大学総合図書館蔵）（注20）は、月岡丹下の挿絵で「八橋」や「富士の山」が半葉となっている。挿絵には、かきつばたが大きく描かれ、人物の姿や衣裳は当世風となっているが、八橋は削られている。画中には『伊勢物語』本文の一部や和歌が書き込まれ、余白にも物語の概略が書き入れられている（図13）。

以上みてきたように『伊勢物語』版本の挿絵は、浮世絵師が手掛けることにより大きく変化したことがわかる。菱川師宣は、嵯峨本の構図を継承しながらも人物描写を変えた。やがて人物は当世風となり、画面上にはかきつばの花が大きく描かれるようになったのである。八橋の描写に注目すると、西川祐信の挿絵（延享四年（一七四七）刊『改正伊勢物語』）には板橋が描かれ、八橋の面影はみえる。しかし宝暦十二年（一七六二）刊『伊勢物語読曲』の挿絵では、八橋の描写はみられない。一方、雛形本のかきつばた模様にも八橋が描かれなくなるのは、享保から宝暦年間以降である。以上の考察により、雛形本は、挿絵の影響を受けたということがわかる。このような表現の変化はなぜか。当時の人びとは『伊勢物語』をどのように読み理解していたのか。物語理解を検討する必要がある。

とあり、巻一から巻四まで着用者の身分別に編集した雛形本である(注9)。かきつばた模様のモチーフは、二図掲載されており、「かきつばた・八橋・水」(御所風)(図9)、「かきつばた・波の丸・雲取り」(お屋敷風)である。巻三の「ふる屋風」には、「いせ物語のもやう」として笈を描いた模様が描かれている(注10)。どの身分においても『伊勢物語』をテーマとした模様は、当時のやはり模様であることがわかる。

しかし元禄以降になると、かきつばた模様に八橋を描く雛形図の割合は減少している(表5)。たとえば、『袖ひいなかた』(元禄五年(一六九二)刊)には「かきつばた・水・松扇」、『当流模様雛形松の月』(元禄十年(一六九七)刊)にも「かきつばた・稲妻」とあり、かきつばたに八橋・水以外のモチーフが添えられている。宝永二年(一七〇五)刊『当世模様委細ひいなかた』には模様題に「かはり八はしのもやう」とみえ、以後刊行される雛形本には、アレンジやバリエーションが多くなっている。その顕著な例は、正徳二年(一七一二)刊『新板風流雛形大成』の模様図三例「帆にかきつばた・水にかきつばた・かすみの橋にかきつばた」である。

### (三) 水辺の景観に描かれるかきつばた模様―享保から宝暦―

『珍色雛形都風俗』(正徳六年(一七一六)刊)以降、かきつばた模様はさらに変化をみせる。元文と明和・安永年間には八橋が描かれるものの、享保、延享から宝暦年間まで八橋を描く模様はみられず、かきつばたの花は、水辺の景観に大きく描かれるようになった。とくに宝暦年間にはバラエティーに富み、宝暦十年(一七六〇)刊『雛形都の富士』にはかきつばた模様が五図も掲載され、模様題は、「河水・浪水・やり水・琴水・干綱」とある。以後「こういつた遊び心は、「かきつばた」を燕の飛ぶ姿にたとえて「燕子花」と表記し小袖模様に描かれている(注11)。かきつばた模様に再び八橋が描かれるようになるのは、明和・安永年間(一七六四―一七八二)である。明和二年(一七六五)刊『雛形吉野山』には模様題に「在原草」と表記され、かきつばた・八橋・流水が描かれている。

以上寛文七年(一六六七)から寛政十二年(一八〇〇)までに刊行された小袖雛形本のかきつばた模様のモチーフをみてきたが、以下のことがいえる。

- 1 かきつばた模様に八橋をともしなうモチーフが描かれるのは、寛文から正徳年間、元文、明和・安永年間である(注12)。

- 2 宝永年間以降は、かきつばたに何らかのモチーフを添えたバリエーションが多くなる。

- 3 享保から延享、宝暦年間には八橋を描く雛形図はみられない。延享年間以降には「かきつばたに流水」のモチーフが多い。

- 4 宝暦年間にはかきつばた模様のバリエーションがさらに増え、かきつばたの花は大きく描かれる。

かきつばた模様のモチーフをさらに詳細にまとめたものが表4・表5である。ここで注目したいのは、次の二点である。ひとつは、小袖のかきつばた模様に八橋が描かれる時期と描かれない時期があること。もうひとつは、かきつばたの花の変化である。そこで『伊勢物語』版本に描かれた九段「東下り」の挿絵を検討したい。

### 三 『伊勢物語』版本にみる挿絵

慶長十三年(一六〇八)刊「嵯峨本伊勢物語」には、上冊に二十五、下冊に二十四、合計四十九場面の絵が加えられており、江戸時代の『伊勢物語』版本の挿絵はこの嵯峨本の構図を継承・発展させたものである(注13)。しかし江戸中期以降、菱川師宣が登場し、挿絵はやまと絵風となり、さらに西川祐信、月岡丹下の手により浮世絵風に姿を変えた。ここでは江戸前期から後期までに版行された十種の『伊勢物語』版本の「東下り」の挿絵を検討し、これらの版本とほぼ同時期に刊行された雛形本のかきつばた模様のモチーフとを比較していく(注14)。比較対象とする版本は表6の作品である(注15)。

#### (一) 江戸前期の嵯峨本系版本の挿絵

慶長十三年(一六〇八)刊嵯峨本(国立国会図書館蔵)の九段「東下り」の挿絵場面には、東下りの途中、三河の国八橋で「かきつばた」の歌を詠む主人公と従者二人の食事風景が描かれている(図10)。周囲には幔幕が張られ、五つの板橋と水沢にかきつばたが咲き乱れている。その構図にみえる雲形の構成法は、桃山時代の土佐派による色紙絵の形跡であろう。この雲取りのモチーフは、宝永五年(一七〇八)刊『新板花陽ひいなかた綱目』に登場して以来、雛形本にも襲用されている。

をふまえた意匠化である。『御ひいなかた』にはこの三図のほかにかきつばたのみを描く小袖模様がある。『御ひいなかた』の刊行以後、雛形本の出版は、年々増加しており、貞享から元禄初年には一年間に数種の雛形本が刊行されている。

貞享三年（一六八六）刊『諸国御ひいなかた』は、書名が示すように模様を御所、江戸、尾張、中国など地域別に分けて編集した雛形本である。

序文には、

此頃都にはやりしもやうゆふせんふう

と記述があり、宮崎友禪の描く扇絵の意匠が、花の丸模様として雛形図に登場している。『諸国御ひいなかた』にはかきつばた模様が三図掲載されている。そのモチーフは、①「かきつばた・八橋・水」（図4）（注7）②「かきつばた・波・網」③「かきつばた・波」である。

翌年に刊行された『源氏ひなかた』は、源氏物語を題材とした読みもの風の雛形本である。源氏五十四帖の人物にちなむ絵姿が五頁おきに挿入され、この絵姿の人物が着る衣裳と見開きで対になる雛形図が、同じ模様に描かれている。かきつばた模様は三図掲載されているが、そのモチーフは、①「かきつばた・八橋の文字」（図5）②「かきつばた・沢の文字」③「かきつばた」である。

さらに貞享五年（一六八八）刊『友禪ひいながた』にも「かきつばた・八橋・水沢」を描く模様が掲載されている（図6）。以上のように寛文から貞享頃までのかきつばた模様のモチーフは、おもに「かきつばた・八橋・水」であることがわかる（表5）。このように『伊勢物語』九段「東下り」を表現するモチーフの組み合わせが定型化したのはいつ頃であろうか。

一条兼良（一四〇二―一四八二）が連歌の寄合語をまとめた『連珠合璧集』には、「杜若トアラバ、池、澤、ぬま水、八橋」とあり、連歌の世界においては十五世紀半ばにすでに杜若と八橋、水とを寄合語として扱っていたことがわかる。

正保二年（一六四五）頃の刊行とされる毛吹草には、

三河路のさはやかなるや杜若 宗房 （四〇一）  
むかし男ほねや折句の杜若 空存 （二四八）

とある。俳諧の付合語を集めた延宝四年（一六七六）刊『俳諧類船集』には、「杜

若」の付合に「八橋、沢、水荃」をあげており、十七世紀後半には「杜若」と「八橋」の強い結びつきが定着していたことをうかがわせる。

（二） かきつばた模様のバリエーション―元禄から正徳―

元禄年間（一六八八―一七〇四）は、雛形本に謡曲意匠がもつとも多く描かれる時期である（表1・表3）。元禄三年（一六九〇）には、謡曲意匠のみをとりあげた『高砂雛形』が刊行されている（注8）。

序文には、

高砂住のへの松も相生のやうにおほえ 浅香山の春紫は宋女成ける女もよう  
に色をつくしぬ されはいにしころ小倉山色紙模様姿 伊達紋尽 其外品々  
雛形出すぬれと 若宵のむかし筆のいたらぬ事のみをかこつ 今山深き此田  
舎にしてなまりかちなる百番謡の模様ふしふし あわぬ所もあれと望める人  
にまかせ 春の花を筆に咲せ心に染る秋色は なかき世に名の形見ともなら  
んかし 陰山 北雪 （傍線は稿者）

とあって「百番謡の模様」と記されており、『高砂雛形』は、当初五十図ずつ上下二冊として出版されたと考えられ、模様は謡曲百番が一番ずつ題材となっている。松坂屋所蔵の『高砂雛形』は、四十六図で模様図には二図を除き、小袖形の背上部に大きな文字を散らし曲目を描いている。そのなかに、かきつばた・八橋にちなむ模様は二図掲載されている。ひとつは、かきつばたに八橋、もうひとつは、八橋の文字を大きく描き、波、舟、桜、松を添えている。元禄十六年（一七〇三）刊『花鳥雛形』には、模様題に「八はし」とあり、かきつばたに板橋が大きく描かれている（図7）。宝永五年（一七〇八）刊『新板花陽ひいなかた綱目』には、「地あけほのちらしすはきの花」「下八橋かきつばた」とあり、小袖の上部に椿の花、裾に「八橋とかきつばた」が描かれている（図8）。

正徳三年（一七一三）刊『正徳雛形』は、序文に「大和絵師 西川祐信 謹序」とあり、後述する浮世絵師西川祐信による雛形本である。その序文には、

今に至るまでその時々のはやり模様 心をつくし手をこめて（略）  
されどその人其位ほどほどありて 似あひたるありにげなきなり

## はじめに

寛文六年（一六六六）に出版された小袖の見本帳『御ひいなかた』には、文芸意匠の一つ「謡曲意匠」が十五種類みられ、以後、小袖の謡曲意匠は江戸時代を通して幅広い支持を得たためか、小袖の見本帳に継続的にとりあげられている。小袖の模様を考えるにあたって、この事実は看過できないにもかかわらず、これまでこれに焦点をあてた研究はなされていない。そこで今回小袖雛形本を基礎資料とし、謡曲をモチーフにした模様を調査した。その結果、時系列でみると謡曲意匠は八十種類に及び、統計的にみると「かきつばた」がもっとも多かった（表1：表2）。「かきつばた」の典拠は『伊勢物語』第九段「東下り」である。『伊勢物語』は慶長年間に「嵯峨本伊勢物語」が版行され、寛文年間以後、絵入り版本が多数出版されるようになった。雛形本にかきつばたの模様が多いのは、当時ももっとも多く『伊勢物語』が読まれていたからであり、これは『伊勢物語』の受容と密接な関係があると考えられる。小袖雛形本の「かきつばた」模様の展開を『伊勢物語』版本の挿絵との比較から検討していきたい。

## 一 先行研究と研究方法

小袖の文芸意匠についての研究には、意匠の典拠となる古典文学についての研究（注1）、小袖雛形本の源氏模様や小袖の『伊勢物語』の模様についての研究（注2）、また桃山時代の小袖の遺品についてその文芸意匠を言及した研究（注3）がある。特に注目される研究に小袖雛形本を中心に文芸意匠全般について統計をまとめた佐々木佳美氏の研究がある（注4）。しかし、佐々木氏の論稿には謡曲意匠の統計と考察があるが、その典拠となる個々の謡曲モチーフには言及していない。小袖の研究資料としては小袖そのものが一次資料だが、現存率が高くなく、いつ制作されたか限定しがたい。小袖雛形本は二次資料だが現存率が高く、時期もある程度限定できる。本研究では、資料に江戸時代に出版された小袖雛形本一〇五種（表1）を用い、寛文から寛政年間（一六六六—一八〇〇年）までの雛形図九千二百六十五図を検討し謡曲意匠の統計と分析を試みた。

## 二 小袖雛形本の「かきつばた」模様

(一) かきつばたと八橋模様—寛文から貞享—  
小袖雛形本にもっとも多く描かれたモチーフは、「かきつばた」である（表2）。「かきつばた」模様の典拠となるのは、『伊勢物語』九段である。『伊勢物語』第九段には、

三河の国、八橋といふ所にいたりぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく河の蜘蛛手なれば、橋を八つわたせるによりてなむ、八橋といひける。その沢のほとりの木のかげに下りゐて、乾飯食ひけり。その沢にかきつばたといとおもしろく咲きたり。それを見て、ある人のいはく、「かきつばたといふ五文字を句の上にすへて、旅の心をよめ」といひければ、よめる。

唐衣きつ、なれにしつましあればはるるきぬる旅をしぞ思

とよめりければ、皆人、乾飯のうへに涙落してほとびにけり。

とあり（注5）、いわゆる「東下り」の場面を描いたもので、男が東国へ向かう途中、三河の国八橋に着く。そこには河が蜘蛛手のように分かれて八つの橋が渡され、かきつばたが咲いていた。そこで「かきつばた」五文字の折句を詠んだ。この情景を八橋とかきつばたのモチーフで表現した模様である。

寛文六年（一六六六）版の改刻再版である寛文七年（一六六七）刊『御ひいなかた』（注6）には「八橋・かきつばた模様」が三図掲載されている。ひとつは、「ぢうすかき」「八はしにかきつばた」とあり、右肩から左裾へ板橋を描き、背には水辺に咲くかきつばた、腰から右裾にかけて波を描いている（図1）。二つめは、「こうしつもやう 地あさき」「八はしにかきつばた」とあり、小袖全体に板橋、かきつばたを描く（図2）。もうひとつには、「ぢももいる」「はしにかきつばた」とあり、左肩から右袖に大きな橋を描き、右裾にかきつばた、右袖上部には雪輪に鹿子絞りと「雪」の文字を描く（図3）。この雪模様は『伊勢物語』第九段、

時知らぬ山は富士の嶺いつとてか鹿の子まだらに雪の降るらん

小袖雛形本にみる謡曲意匠

―「かきつばた」模様を中心に―

抄録

小袖の謡曲意匠は、江戸時代を通して小袖の見本帳に継続的にとりあげられている。小袖の模様を考えるにあたって、この事実は看過できないにもかかわらず、これまでこれに焦点をあてた研究はなされていらない。そこで寛文から寛政年間（一六六六―一八〇〇）までの小袖雛形本に謡曲をモチーフにした模様を調査した。その結果、時系列で見ると謡曲意匠は八十種類に及び、統計的にみると「かきつばた」がもっとも多いことが明らかになった。「かきつばた」の典拠は、『伊勢物語』第九段「東下り」である。『伊勢物語』は寛文年間以後、絵入り版本が多数出版されるようになった。これは『伊勢物語』の受容と密接な関係があると考えられる。本稿では、かきつばた模様の展開を『伊勢物語』版本の挿絵と謡曲「杜若」の詞章から分析した。

小袖雛形本にみる謡曲意匠  
— 「かきつばた」模様を中心に—

遠藤 貴子\*, 綿拔 豊昭\*\*

A study on the *Kosode* design inspired by Noh lyrics, found in a book of patterns  
from the Edo period: Focus on *Kakitsubata* (iris) motif

Takako ENDO, Toyoaki WATANUKI

抄録

小袖の謡曲意匠は、江戸時代を通して小袖の見本帳に継続的にとりあげられている。小袖の模様を考えるにあたって、この事実は看過できないにもかかわらず、これまでこれに焦点をあてた研究はなされていない。そこで寛文から寛政年間（1666 - 1800）までの小袖雛形本に謡曲をモチーフにした模様を調査した。その結果、時系列でみると謡曲意匠は八十種類に及び、統計的にみると「かきつばた」がもっとも多いことが明らかになった。「かきつばた」の典拠は、『伊勢物語』第九段「東下り」である。『伊勢物語』は、寛文年間以後、絵入り版本が多数出版されるようになった。これは『伊勢物語』の受容と密接な関係があると考えられる。本稿では、かきつばた模様の展開を『伊勢物語』版本の挿絵と謡曲「杜若」の詞章から分析した。

Abstract

*Kosode* (small sleeve kimono) designs inspired by Noh lyrics were found in pattern books (*Hinagata-bon*) for *Kosode* design throughout the Edo period. Although this is an essential aspect in *Kosode* patterns, until now no such study has been conducted. This paper examines the use of Noh lyrics as motifs for *Kosode* during the period from the Kanbun era to the Kansei era (1666-1800). Eighty designs based on Noh lyrics were found; the *Kakitsubata* motif was the most commonly used. The source of *Kakitsubata* is found in episode 9 of 'Azumakudari' from *The Tales of Ise*, an anthology from the Heian period. A pictorial version of *The Tales of Ise* has been published extensively since the Kanbun era; thus it can be thought that there is a relation between trends in *Kosode* design and the popularity of *The Tales of Ise* at that time. This paper presents an analysis of the *Kakitsubata* design in the illustrations of the book in relation to the lyrics of the Noh play song *Kakitsubata*.

- \* 筑波大学大学院図書館情報メディア研究科博士後期課程  
Doctoral Program  
Graduate School of Library, Information and Media Studies  
University of Tsukuba
- \*\* 筑波大学図書館情報メディア系  
Faculty of Library, Information and Media Science  
University of Tsukuba